〔鹽尻二十三〕一尾州海西郡田尻庄に茂井村といふ所に、八十餘りの老民あり、菊を愛して數千本植ゆ、今年寶永六己丑九月、一根に菊蓬兩種連理す、更に五味氏に告て、十月朔日公に獻ず、

〔鹽尻五十四〕菊重陽の節物、紅葉は季秋の觀にす、詩歌にも詠じ侍る、然るに近年九日に菊さかんなること希にして、紅葉も神無月ならでは色なし、氣候も古今同じからざるにや、〇略中さてもはかなくなりしもの、去年實種せし菊の生ひ立て、花も大きやかに、淺紫の色したるを、嬉しき事にして、是は名付てよといひし程に、淺紫の賞すべきは、天龍寺にこそと戯れしを、頓て自筆して名とせし、又單にして白く青をかくるをば、如何といふべきやと見せける程に、單に藍すれるは小忌衣にこそあれといひし、是等の花など、こゝろなく今年も開きて、いみじき姿見るこそ、こしかたも思はれ、露けき袖も今一入にしほれて、あだなる記念なりける、

〔先哲叢談五〕安積覺、字小先、小字覺兵衛、號老圃、又號澹泊齋、〇略中澹泊甚愛菊、園中多栽之、嘗上百種于守山侯、侯亦賜佳品十餘種、寄田子愛、書曰、亡師朱文恭、有乞菊於義公、帖載在遺文外集、覺百事不能學文恭、而唯此一事、稍存餘風、不亦可羞之甚哉、又賀鳩巣七十序曰、吾百事不能、而唯知養菊、培植三十年、頗能得其要領、乃以菊譬鳩巣、以成一篇、鳩巣亦其黄花塢詩自註曰、主人有菊癖、凡諸家奇品莫不旁搜並收而栽培之、種藝尤精、品第極嚴、每至秋時、五色燦爛、以奪人目、而安積氏之菊聞於國中云、

〔甲子夜話四十一〕林子曰、コノ十月ノ事ナリシ水戸參議ドノヨリ、園菊ノ花ヲ庭製ノ花斗ニ插シテ、後樂園中ニテ各種ノ樂燒ヲ作ラル昔朱舜水ノ菊苗ヲ乞シ書付ヲ新刻セラレ、石摺ノ四石ヲ貼金シ、上包ノ表墨流シ、裏青無地ノ鳥子紙二枚ニシテ、紫ノ打緒ヲ以テ結タルヲ副テ貼リケル、參議ドノヽ雅懷ニハ感奉リヌ、中々普通ノ詩ヤ歌ヨリモ遙ニ意表ニ出タルコトナリシ、但ソノ菊花四品トモ皆朱氏ノ書付ニ見ユル、各種バカリヲ插レタリ、眞ニ面白キコトニゾアリキ、カノ新刻ノ文、